

企業経営者に天才は要らない？ 鈴木幸一 III会長

2019/2/5 6:30 | 日本経済新聞 電子版

毎日のように、訪日する知人や友人が訪れて、話をする機会があるのだが、海外のこと、特に、経済状況や技術革新の進展度といったある程度、指標から推測ができる分野と違い、不確定要素の塊のような政治のことは、本当のところよくわからない。おおよその見当をつけて、各国の状況を推察するだけで、その国に住む知人から、現在の状況について、日本のメディアにはほとんど報道されない感想を耳にすると、「そうなの」と、驚くことも多いのだが、知人も立場によって異なり、その内容がどこまで正しいのか、一般的なのかは、聞いている方が咀嚼（そしゃく）するほかない。



経営者ブログ

ビジネス界のご意見番ともいえる一流経営者本人が政治・経済に関する日々の思いなどを綴ります。ビジネスパーソンの方のヒントが満載です。随時掲載

先週も中国の古い友人がオフィスに訪ねてくれた。むかし、ビジネスを通じて知り合った友人なのだが、仕事の話はさておいて、今や、圧倒的な権力者となり、ますます厳しい監視・統制を強めている中国の習近平について話がいく。

「習近平は、まさに文革で教育も混乱しきっていた時代に育った世代で、基本的な学習すら受けられなかった世代です。当然のことながら、子供の頃から、教養を身に付けられる世代ではなかった。学問や教養と政治家の資質が相関するものではないということは分かっていても、中国の知識人には、教育も受けず、なにも知らない習近平に対し、軽侮の念をもって嫌う層が存在し、将来を不安視する人が、年々、増えて

いますね。まして、法律が変わって、次に交代がなくなってしまった。毛沢東の晩年のようにになったら、大変です。その意味では、米国の大統領がトランプでよかった、彼はジャスト・ネゴシエーターに過ぎないから。ただし、米国は、大統領の権限がいくら強大だといっても、チェック・アンド・バランスが効いていて、国防省や国務省をはじめとして、行政府の権限が強く、中国が覇権を握るとか、言わずもがなの挑発的な言葉を使っていることに対し、中国の軍事的な拡張に対する米国の強硬派の危惧、反発を強めているのは、愚かなことだと思いますね。その意味でも、習近平が交代することはなくなってしまったことは、大きな不安ですね。毛沢東の晩年のようににはならないと願ってはいますが」

習近平にとって、トランプが米国の大統領で、よかったのかどうか、そんな気もするのだが、ほんとうのところ、私の知るところではない。「そういえば、日本はフランスになろうとしているのですかね。『勤労精神』を失わせる政策を実行しているような気がします。日本を尊敬しているのは、なによりも、勤労を尊ぶという共通なコンセンサスが、上から下まで、あらゆる層のコンセンサスとしてあって、中国の人間として、日本には、なかなかかなわないと思ってきたのですが」と。フランスを持ち出すのは、いかがかと思うのだが、若い頃、フランスで働くことがあって、夕方5時になると、会議の途中でもなんでも、突然、「セ フィニー」という声が上がって、終わりにしてしまうので、初めはびっくりしたものだが、そのうち、慣れてしまった経験を思い出した。ただし、一般論としてフランスを持ち出すのは、もちろん、フランスに対する彼の誤解である。

ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理」とは違った意味で、労働とか仕事に対する日本人の倫理観が、日本を支えてきたことも確かである。祝日を増やし、労働時間を短縮することで、それに代わる価値観をつくろうとしているのだとしたら、それは日本を弱くするための第一歩かもしれない。庶民が真面目で勤勉であるのは、日本が長年にわたって培った国民性である。厳格な階級社会がないことも、真面目に努力を積み重ねるということにつながっているのだろう。ベルリン・フィルの友人の名チェリストが、「僕の親父は腕のいい壁塗り職人で、そんな生まれというか、家柄で、クラシック音楽の世界で活躍する音楽家は稀（まれ）ですよ」といった言葉を思い出すことがある。時代に応じて、伝統的な生活スタイルを変えていくことが悪いわけではないけれど、変えることで、すべてを失うこともあるということを、深く考えて政策にすべきだと思うのだが。

長い付き合いとなった指揮者のリッカルド・ムーティさんが、シカゴ交響楽団を率いて日本公演を行った。演奏を聴いて「ムーティさん、もう、仙人の境地ですね」と、話したのだが、そもそも「仙人」という言葉が的確ではないことで、うまく言わんとする意味が伝わらなかった。音楽を自在に表現するという言葉では、伝わらないと思って、理解できそうにない言葉を使ってしまったのだが、そんな表現を使いたくなるほど、自在な演奏をしていて、それに応えるシカゴ交響楽団もすっかり変わ



鈴木幸一（すずき こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットアジアティブ（III）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

っている。名人が集まって、凄い音を鳴らすといった思いが強かったのだが、ムーティさんが音楽監督になって数年で、すっかり優美な表現をする、どちらかといえば、ヨーロッパのオーケストラの響きになっている。ヴェルディのレクイエムなど、ゆったりしたテンポになって、何度も聴いているはずが、ここはこんなに美しい小節だったのかと、感動させてくれたりした。東京公演の最後の曲目であったリムスキー・コルサコフの「シェエラザード」は、シカゴ交響楽団の個々の演奏家の名人芸を見事に引き出して、この曲では、経験したこともない感動をしてしまった。思わずめったに口にしないはずが、「珍しい、鈴木さん、ブラボーって叫んでいましたよ」と、隣の席に座っていた友人にからかわれてしまった。叫んだ記憶などないのだが。

音楽監督が変わることで、オーケストラが見違えるようになるというのは、よく、あることだが、長い伝統を持ち、世界でもトップクラスのオーケストラをより高みに持っていくのは、大変なことである。組織のトップという意味では、企業経営者も、似た存在であるはずなのだが、伝統のある大企業になればなるほど、伝統を生かしながら、絶えず、新しい企業として発展させることは難しい。指揮の世界におけるムーティさんのような突出した天才を、企業経営の世界で見いだすことはできるのだろうか。そもそも、大組織には突出した天才経営者など、不要な存在というか、外部から突然、優れた経営者を引いて来ること自体、難しいと同時に、それが実現できたとしても、失敗に終わるケースが多い。



ムーティ指揮シカゴ交響楽団 2月3日東京文化会館 photo: Todd Rosenberag

節分が過ぎて、立春である。節分の日暮れ、ひとり、豆まきをするのも、侘（わび）しい光景で、節分用に煎った大豆をぼそぼそ食べながら、ビールを飲んでいるうちに、眠気が襲って、ソファで居眠りを始める。ふと、ニュースを思い出す。シカゴはマイナス50度、シドニーは46度、どちらも記録的な気温である。激しくなるばかりの異常気象のニュースを見るたびに、いつまで人間が生存できる地球なのだろうと、いつもながらの不安にとらわれるのだが、眠気に任せていると、風邪をひくに違いないと、ベッドにもぐりこむ。平和な休日の節分である。

鈴木幸一 IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.